『協同労働がつくる新しい社会』－永戸祐三の格闘－を読んで

永戸祐三さんは亡くなる前に一冊の書を著しました。『協同労働がつくる新しい社会』（旬報社）です。「永戸祐三の一代略記だが、それ以上に、協同労働の形成史」（西谷氏）、「社会を変えようと血のにじむような努力をしてきた人間の人生史であり、彼が関わった社会史」（汐見氏）、「読む者に希望を与える著書」（岩垂氏）。推薦の言葉から。他にも多くの方々から声を寄せていただいています。

根本的な「革命性」孕んで

西谷 修　東京外語大学名誉教授、日本社会連帯機構副理事長

岩波ブックレットのタイトルともなった「必要から始める仕事おこし」、その枠組みとしての協同労働法が、この半世紀を通しての全日自労から始まる、傑出した、しかしつねに平場に立つ人物の、たゆまぬ組織作りと、それを支え協力する多くの人々の連携の中から作り出されてきた。この本は、それを担った当人しか書けない永戸祐三の「一代略記」ではあるが、それ以上に、さまざまな社会運動・労働運動の確執と協同の中から生まれた、日本における「協同労働」の「形成史」である。

それは「協同労働」という理念を育む実践だったわけだが、その内実たる「よい仕事」作りは、雇用関係の中でしか成り立たない「労働」という概念を、その枠組みから解き放ち、人びとが生きる生活の足場から、人びとのつながり、地域とのつながりという「社会性」を編み上げてゆく、根本的な「革命性」を孕んでいる。生活から「離陸」してしまった産業化社会の活動をもう一度生活のなかに埋め戻すような、そして生活を社会活動の中軸に据え戻すような、世界史的意義をもつ実践なのである。

この運動の柔軟な組織化を並々ならぬ胆力で担ってきた永戸祐三氏が半年余りの闘病の末逝った。社会運動はつねに「道半ば」だが、亡くなる一カ月前に、その遺言と言ってもいい『協同労働がつくる新しい社会』が刊行された。本書の最後に「これから」として永戸の「夢」（課題）も肉声の語りのように書き残されている。この混迷の時代に見通しをつけるわれわれへの得がたい贈物である。

めざした本当の民主主義

汐見稔幸　東京大学名誉教授、白梅学園大学名誉学長

学生運動が盛んだったころの戦後史を、機動隊との派手な攻防のような表面的なものではなく、当時青年だった人間の必死の社会改革の営みとして書き残そうとする努力は、今、東大や中央大二部などで始まっている。

そういう流れの中でこの本の出版。永戸の（ずっとこう呼んでいたので今更さん付けでは呼べない。ごめん）個人史だが、60年代、70年代の学生運動に触発されて、それまでと異なった視点から社会を変えようと血のにじむような努力をしてきた人間の人生史であり、彼が見て関わった社会史だと思う。

全学連時代のことも出てきて懐かしく思い出したが、なかで永戸が二部出身の学生が委員長になるなんて、という思いを持っていたことに触れたところは、へぇーと思った。ぼくは逆に二部に在籍し、勤労しながら大学をも変えようとしているなんて、すごい連中だと思っていたのだ。結局彼はその力量と人望で委員長を引き受けたが、思いは、権力をとって社会を変えようとするのとは異なる社会改造、つまりすべての人が主人公になる社会をなんとか実現できないか、というところに一貫してあった。ワーカーズがめざそうとしていたのは、その意味で本当の民主主義で、生きていたらアメリカのJ・デューイが一番喜んだと思う。

学生運動時代の同志たちは、あちこちに散って、今でも大学教員とか社会活動をしている人も多い。永戸の死を機に、もう一度、この社会をどう変えるべきかということに思いをいたすのではないか。

奥 克彦

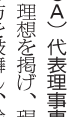
衆議院法制局

永戸さんが、若い頃から、さまざまな運動に熱く取り組まれてきた経験がいきいきと描かれ、岩波ブックレット「〈必要〉から始める仕事おこし　協同労働の可能性」の際には省略されていたドロドロの数々も書かれ、楽しく読ませていただきました。書かれていない失敗・苦い思い出もたくさんあったとも想像しますが、若い頃からこれほど人を動かす能力や構想力があったとは、すごいと思います。

永戸さんは立派なよい人生を送られました。永戸さんの魂は、今後も地上における運動のサポートをされることでしょう。

比嘉政浩

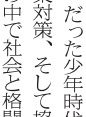
一般社団法人　日本協同組合連携機構（JCA）代表理事専務



理想を掲げ、現実と格闘し、多くの方を鼓舞し、輪を広げてこられたことに敬意を表します。

本田由紀

東京大学大学院教育学研究科教授



「よそもの」だった少年時代から学生運動、失業対策、そして協同労働へ。戦後史の中で社会と格闘した人生が描かれており、読み物として非常に読みごたえのある自伝である。私は、永戸氏にインタビューをさせていただいたことがあるが、その思い出とともに、雇う／雇われる関係へのオルタナティブとして〝よい仕事〟の実現を目指した永戸氏の思考と行動をたどりなおしている。

金子 勝

慶應義塾大学名誉教授

失業対策事業が打ち切られていく中、労協運動を新たに切りひらいてこられたことは、とても立派なことだと敬意を払っています。

田中淳夫

NPO銀座ミツバチプロジェクト副理事長
農業生産法人㈱銀座ミツバチ　代表取締役

読んでみたら大変面白く、行き帰りの電車の中ですっと永戸節が耳に残ってしまいました。永戸少年が生まれ育った環境が、地域を客観的に見る経験を養い、これが起点として、全国規模で学生をまとめ上げる能力を発揮したように思います。その後、労協を立ち上げていく過程は、登場人物たちのそれぞれの立場がリアルに表現されていて、課題は大きかったけれど、改めて「人たらし」の永戸さんだからこそ、今の巨大な組織を作り上げることが出来たんだなと考えさせられました。

全学連の集会でアジテーションをする永戸さん
（いつどこでの写真かわかる方はお知らせください）

地域から社会変えていく働き方

関 昭生　JTSU（日本輸送サービス労働組合連合会）執行委員長

学生運動と労働運動から労働者協同組合へと、常にこの社会の底辺から運動を創造してきた永戸さん。「労働組合には内向きになる傾向がある」という指摘をいただき、「そうだ、労働組合は地域とともに歩むことが大事だ」と気付かされました。本書を読むと、永戸さん自身もまた、組織が内向きになることに苦悩してきたのだと思います。

非正規雇用が4割と言われる日本では、「個人事業主」と称して「労働者」とさえ位置付けられないような働き方や、「スキマバイト」のようなギグワークが経済を支えています。その社会に生み出された「労働者協同組合法」は、一筋の希望の光です。

「混沌（こんとん）」を通り越して、今や破局が近づくような社会の中で、協同労働という働き方と労働者協同組合は、「働かされる労働」を「能動的な労働」へ転換し、地域とともに人々の「生きる力」を引き出し、市民が地域から社会を変えていく働き方として注目されていくと思います。

定年を迎えた高齢者、将来に希望を見いだせない若者にも、ぜひ読んでいただきたい一冊です。

前途に希望を与える著書

岩垂 弘　ジャーナリスト

労働者協同組合法が2022年10月1日から施行された。労働者自身が出資、運営し、働く事業体を協同組合の一形態として認めようという法律だ。日本の歴史に初めて登場する新しい労働形態、新しい協同組合の形態で、まさに日本近現代史上、画期的な出来事である。

労働者協同組合法をつくろうという運動には、おびただしい人たちが精魂込めて関わったが、2人の名前が印象に残る。全日本自由労働組合（全日自労）委員長だった中西五洲さんと日本労働者協同組合連合会理事長だった永戸祐三さんである。

本書は、永戸さんの少年時代から現在までの一代記だ。学生運動に没頭した時代の報告も面白いが、本書の核心は、やはり全日自労→中高年雇用・福祉事業団→労働者協同組合という流れの中で全力投球した記録だろう。働く者の自立性・主体性・主人公性を確立するための情熱と苦闘がひしひしと読者に伝わってくる。加えて、日本では存在しなかった労働者協同組合法が日の目を見るまでには、多くの人びとによる苦心、工夫、協力があったことが書かれており、読者を感動させる。読む者に希望を与える著書だ。一読を勧めたい。